



二 遭遇二

「次はA駅。次はA駅」

俺が不満をたらたらと毒づいているうちに、地下鉄はT駅のホームに止まった。ドアが開く。赤ちゃんたちはドアから一斉に頭から出ていく。中には、他の赤ちゃんたちに押されてか、お尻から転がり出ていく者もある。まるで、外からの力で吸引されているようだ。乗って来た時とはスピードが違う。はあい、はあいがハイ、ハイに変わっている。

俺が眼を瞬かせている間に、俺がいる車両からは赤ちゃんたちはいなくなった。最後に、俺の膝の上に王様のように座っていた赤ちゃんもおしめをもそもそと動かしながら、何の挨拶もなくドアから出て行った。最初に乗ってきたように、元のがらんどろになった車両。

あれは、一体、何だったんだ。

俺はやっぱり、まだ、酔っているんだ。

いかん、いかん、明日もまた仕事だ。早く、酔いを覚まさないで。

俺は立ち上がり、酔いを醒ますため、風に当たろうとドアの方に近づいた。

なんだ、こいつら。

そこには、サラリーマンたちが列をなして並んでいた。ひとり一人が順番に、俺の横から車両に乗りこんで来る。だが、みんな俯いて、その顔は疲れている。中には、俺のようにほろ酔いかげんの者や泥酔状態の者、千鳥足のダンスを踊っている者もある。サラリーマンたちは車両に乗り込むと我先に椅子に座っていく。座席が一杯になると、吊革につかまる。ドアにもたれかかる。あっという間に、車両は満員状態になった。朝の通勤状態と同じだ。

俺の周りはサラリーマンだらけになった。足の踏み場もない。俺は、最後の砦として、自らの立ち位置だけはしっかりと確保した。ここが、尖閣諸島だろうが、竹島だろうが、どこでもいい。自分の足の踏み場だけは確保しないと。そうしないと、地下鉄が揺れる度に、自分の体も揺れる。急ブレーキをかければ、それこそ慣性の法則どおりに雪崩の如く倒れてしまいそうだ。でも、よく考えれば、俺の会社での立場も同じようなものだ。なんとか持ちこたえているのが現状だ。

人事異動で、上司が代わったり、自分が別の職場に代わると、途端に、自分の拠り所はなくなり、ちょっとした上司の言動やお得意さんの言動、職場の同僚や部下の言動で、流されるまま、時には、もんどり打って倒れたりもする。

こいつらも可哀そうな奴らなんだ。いや、俺もそのうちの一人なんだ。だが、可哀そうはいいが、なんだか臭い。汗臭いような、整髪料が腐ったような、酒と胃液が混じったような、それとも、年齢が加わった体臭なのか、とにかく臭い。

そりゃ、そうだ。この車両に一杯のサラリーマンがいるんだ。その数、百人はくだらないだろう。赤ちゃんたちはほぼ平面に埋め尽くされていたが、サラリーマンたちは三次元五埋まっている。それも、若い奴から定年近い思われる人まで、サラリーマンだらけだ。臭いが充満してもおかしくない。

だが、耐えきれない。何とかならないのか。

あつ。

地下鉄が急ブレーキを掛けた。ささやかな、靴二足分の領土を守れることなく、俺は慣性の法則の波に飲み込まれた。横倒しになるサラリーマンたち。だが、運よく吊革に掴まることができたサラリーマンは柳に風とばかりに、波を受けながらも態勢は維持している。また、椅子に座ったサラリーマンは座ったままで、首だけのドミノ倒しで終わることができた。

悲惨なのは、俺もその一員である床に倒れたサラリーマンたちだ。それでも、誰かの上に乗って掛かった者はいい。問題は床と他のサラリーマンの間にサンドイッチになった俺だ。

仕事の重圧だけでなく、人間の生身の体の重圧も受けたのだ。不幸が不幸を呼んでくるとはこういうことなのか。

俺はもがいてた。俺の現在地は、ちょうど背広と下着の間にあるYシャツのようなものだ。サンドイッチで言えば、パンとパンの間の卵やマヨネーズやキャベツやハムなどのような具だ。片方がよれよれならば、片方はぐじゃぐじゃだ。

俺は立ち上がろうとするが、他のサラリーマンがいて足を付ける場所がない。しかも、俺の上には別のサラリーマンが当然の顔をして乗っている。何とかしてくれだ。だがどうにもならない。

このままで、このままで、いいんだ。

そんな気持ちになってくる。

いや、だめだ。何とか、立ち上がるんだ。

そんな気持ちも沸いてくる。

ピンポンパン。ピンポンパン。

何だ。この切迫した状況で、体操の時間か。まさか。

車掌からの車内放送だ。

急ブレーキをおかけして申し訳ありません。突然、サラリーマンがレールを横断しようとしたので、急停車をしました。なお、サラリーマンは無事です。少し酔っているようです。万が一のため、救急車を呼びました。もうしばらくしたら、地下鉄は発車します。

ピンポンパン、ピンポンパン。

車内放送が終わった。

パチパチパチ。

突然、拍手が鳴った。拍手が拍手を呼んだ。車両全体が拍手で包まれた。

仲間が救われたこと嬉しいんだ。

折り重なりながらも俺もつられて拍手をする。

だけど、ここは地下鉄だぞ。なんで、レールを横断できるんだ。どこかの駅が封鎖されて逃げようとしたのか。それとも飛び降り自殺でもしようとしたのか。疑問だ。

だが、それよりも早く俺の体からどいて欲しい。いつまでも、組み立て体操が崩れたままの態勢ではられない。

でも、倒れた全員の意志が一致しないと起き上がれないのは事実だ。個々人が自分勝手に起きあがろうとするから、余計に足や手が重なり合い、ちょうちょ結びのように組重なってしまい動かなくなっている。

こういう場合は、何か外からの圧力がないとだめだ。自分たちだけの力では、かえって破滅の道に進んでいるように思える。このままでは知恵のない人間知恵の輪だ。その輪を解きはなつのは別の叡智が必要だ。

ガタン。ゴトン。

俺たちが倒れたままなのに、地下鉄は素知らぬ顔で動き出した。そして、これまでの遅れを取り戻すかのように車両はスピードを上げていく。